

プロダクトデザイナー  
**大野 英憲**さん  
おおの ひでのり

横浜市在住。貴金属の販売やデザインを13年間学び、2006年に独立。秋田の伝統工芸や曲げ木の技術を生かしたデザインを次々と生み出すプロダクトデザイナー  
<http://www.wgj.co.jp>



一期一会がくれる  
アイデアの種で  
どこにもないものを  
生み出したい



曲げ木製二輪玩具・Type zero one  
ブナとカバの集成材＝曲げ木をほとんどのパーツに用いた、児童向けのトレーニングバイク



コインブロック  
日本の古銭をイメージして  
コインブロックは生まれた。  
ならべる？  
ころがす？  
かさねる？



DictionaryHorn  
スマートフォン用共鳴スピーカー。表紙を開くと辞書内部がスピーカー（朝顔型）になっているため、スマホの底面付近の内蔵スピーカーの音を共鳴させることができる。全てのスマートフォンに対応

木製二輪玩具、デイクシヨナリー・ホーン  
：爽やかな木の香りを放つ、独特なフォルムと柔らかい手触りの作品たちを手掛けるのは、ワークス・ギルド・ジャパン／プロダクトデザイナーの大野さん。生活の拠点は横浜に置き、月に10日程度秋田市にてデザイナーとして活躍する。「縁あって秋田でデザインをすることになったのは約12年前。デザイナーとして独立を考えていた頃、今の社長に『新しい事業を始めたいから手伝ってくれないか』と誘われたことがきっかけです」。

最初は秋田杉を使って家具を作れないかと考えた。「秋田県の伝統工芸『曲げ木』を取り入れた、曲線を多様化した椅子をデザインしました」。だが現実には厳しい意見が多く「いろんな人に欠点を指摘されて。このデザインだと実現は難しいと言われていたんです」。

そんな時に、運命的な出会いがあった。「秋田市のとある家具製作所の社長さんを紹介されて、伺ったんです。その時はすでに弱気になっていたのですが『このデザインのここを変えたら実現できますか』と話したら『何言ってるんだ』って。『それじゃあこのデザインが死んじゃうじゃないか。どうしたら実現できるかを考えるのが僕たちの仕事だよ』と一言。一瞬で『この人と仕事がしたい』って思いました」。

それから1年ほど、秋田に来ては製作所を訪れる日々が続いた。椅子では費用がかかり過ぎることを知り、何か他にアイデアはないか探していた頃、友人の一言が扉を開く。「友人からドイツにあるキックバイクが面白いよ、と教えてもらって。ふと、キックバイクと曲げ木が僕の中で融合したんです。調べると木製のキックバイクは、まだ日本になかったので、『これだ』、と」。

そうして完成した「曲げ木 木製二輪玩具」は2011年にグッドデザイン賞を受賞、その後も持ち前のセンスでオリジナリティーあふれる作品を数々生み出した。ものづくりを後押ししているのは、心を揺さぶる出会いの数々だと言う。「僕の場合、何を作るかというよりも『この人と一緒に仕事がしたい』という出会いが先にあって。人にほれ込んで、そこからアイデアが湧き出てくるんです」。

加えて、譲れない信念もある。「秋田にない、日本にない、世界にないものを作ること。そして、僕が秋田に来ている意味を形にしたいんです」。メイド・イン・秋田のオンリーワン、それが大野さんがずっと大切にしてきたポリシー。これからの信念を胸に、大野さんしかできないものづくりを進めていく。